

なるほど！ワークショップ講座

“幕末～明治の芸術・文化”

< フローチャート >

1. 導入

2. 擬似フィールドワーク

PART I：幕末から明治にかけて日本を訪れた外国人の記録

- ①資料を読む
- ②グループ・ディスカッション
- ③各グループからの発表
- ④解説

PART II：日本芸術・文化の海外流出とその影響

- ①資料を読む
- ②グループ・ディスカッション
- ③各グループからの発表
- ④解説

PART III：日本美術と西洋美術、現代人の評論

- ①資料を読む
- ②グループ・ディスカッション
- ③各グループからの発表
- ④解説

3. まとめ

石川 恵悟

今回は幕末～明治に絞っていますが、歴史考察においては古代から近現代までを通史的に分析することを心がけています。教育やメディアにおける偏りに対して冷静に対処し、fact finding（＝事実の探求）を大切にしています。

< P A R T I >

ラザフォード・オールコック（英国の初代駐日公使、1859～1862年）

すべての職人的技術においては、日本人は問題なしにひじょうな優秀さに達している。磁器・青銅製品・絹織り物・漆器・冶金一般や意匠と仕上げの点で精巧な技術をみせている製品にかけては、ヨーロッパの最高の製品に匹敵するのみならず、それぞれの分野においてわれわれが模倣したり、肩を並べることができないような品物を製造することができる…

V・F・アルミニヨン（イタリアの軍人・外交官、日伊修好通商条約調印時に使節として来日、1866年）

日本の漆は極めて美しい一種のワニスで、湿気や熱湯に強い。これらの中には、貝殻、象牙、金、銀などで象眼を施し、驚くべき精巧さを持つ模様をつけた物もある。また、小さな姫簞笥ほど優美なものはない。これには小さな引き出しがたくさんついていて、婦人たちは大切なものをしまっておくのである。

絵画については語るべきほどのことはない。素描は滑稽画の域をほとんど出していないし、人物の顔には表情がない。ポーズもまるで不自然である。遠近法も考慮されておらず、輪郭も正確さを欠いている。それにもかかわらず、色彩の見事さはまことに称賛に値する。古い昔から、日本人は印刷術および木版を知っていた。日本人が創始工夫した優れた技法の中には、ヨーロッパではまだ知られていないものもある。

アレクサンダー・F・V・ヒューブナー（オーストリア外交官、ナポレオン三世治下のパリでオーストリア大使、1871年）

この国においては、ヨーロッパのいかなる国よりも、芸術の享受・趣味が下層階級にまで行きわたっているのだ。どんなにつましい住居の屋根の下でも、そういうことを示すものを見いだすことができる。たとえば、造花、精巧な子供の玩具、香炉、偶像、その他もろもろの物。こういうものの目的は、ひとえに目を楽しませることにある。我々ヨーロッパ人にとっては、宗教のために用いられるのでなければ、芸術は金に余裕のある裕福な人々の特権にすぎない。ところが日本では、芸術は万人の所有物なのだ。

バジル・ホール・チェンバレン（英国の日本学者、日本の事物誌や旅行案内を書く、東京帝国大学の言語学教授、1873～1911年）

日本人の天才的資質は、小さな物において完全の域に達する。茶碗、お盆、湯わかしをも美術品に作りあげ的方法…これらを日本人の半分もよく知っている国民はいない。

エミール・ギメ（フランス人実業家、ギメ東洋美術館を創設、1876年）

日本人は何と自然を熱愛しているのだろう。何と自然の美を利用することをよく知っているのだろう。安楽で静かで幸福な生活、大それた欲望を持たず、競争もせず、穏やかな感覚と慎ましやかな物質的満足感に満ちた生活を何と上手に組み立てることを知っているのだろう。

パーシヴァル・ローエル（米国人実業家・天文学者、1883～1892年）

芸術は、タバコが吸われているのと同様に、広く民衆の間に普及している。これは日本の人々が生まれながらにして持っている権利で、この才能は隠しようがない。この国の隅から隅まで、高貴な王子から最も身分の低い農民にいたるまで、芸術は至高の権威を持っている。

彼らは頭のとっぺんから爪先まで芸術家である。手先の器用さにも感心させられるが、しかし彼らの芸術的感覚の鋭さにはさらに感心させられる。それは完璧なまでに芸術家である。宇宙についての彼らの理解は劣っているが、しかし美についての感覚は鋭い。彼らにとって科学とは見ず知らずのものだ。しかし、彼らは芸術とは最も親密な関係にある。

アリス・メイベル・ベーコン（米国の教育者、津田梅子の開いた女子英学塾（後の津田塾大学）の運営に協力、1888、1899年）

平民階級を語る上で忘れてならないのは、その多くを占める職人である。日本が芸術や造形、色彩の美しさを大切にしている心がいまだにある国として欧米で知られているのは、かれらの功績である。職人はこつこつと忍耐強く仕事をしながら、芸術家のような技術と創造力で、個性豊かな品々を作り上げる。買い手がつくから、賃金がもらえるから、という理由で、見本を真似して同じ形のものや納得できないものを作ることはけっしてない。日本人は、貧しい人が使う安物でさえも、上品で美しく仕上げってしまう。

フリーダ・フィッシャー（ドイツの女性東アジア美術史家、夫アドルフ・フィッシャーとともに5回の日本美術研究旅行、1897～1912年）

欧米のコレクターは、奪い取るようにして浮世絵版画を買い求めている。だが、それにひきかえ、日本の美術関係者は浮世絵にはいかにも冷淡すぎると思う。日本の博物館は、浮世絵を完全に無視している。「このような卑俗なものは、当館にふさわしくありません」しばらくまえ、館長の山高氏はにべもなく、こう言い放った。日本の芸術家や博物館関係者がわたしたちを訪れたとき、～、八人が八人とも写楽という名前に何の反応も示さなかった。つまりかれらは、なんと写楽を知らなかったのだ。

およそ木版浮世絵ほど、日本民族の諸相をありありと写しだす芸術はないと思う。浮世のひとびとの日常の起き伏し、市井風俗、それに民衆の精神の内奥にまで絵師はまなざしを向ける。そして、そのまなざしが獲得したものを濃密に把握して表現する。景物、市街、家屋、農夫、手職人、美人、幼児、祭礼、役者、歴史、文学、花、鳥。ありとあらゆるものを、絵師はみずみずしく版画の画面において活写する。

いずれ日本の博物館は、逸したものをとりもどすのに大労苦をはらわねばならぬだろうし、早晚、浮世絵についての旧認識を変更せざるをえない日がくるのは確実だ。わたしは、それを一瞬たりとも疑っていない。だから、つぶぞろいの高嶺コレクションが散逸することもなく、いつまでも日本国内にとどめおかれてほしいと痛切に願っている。

ミシェル・ルヴォン（スイス生まれ、フランスの法学者、東京帝国大学法科大学のフランス法の講師として来日、1893～1899年）

芸術の上では日本人は実に天才的だ。

＜ P A R T II ＞

表 1. 関連年表

1851 年	<p>ロンドン万国博覧会（初めての万博）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本の物は中国セクションの一部に
1854 年	<p>日米和親条約を契機とする開国</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>浮世絵などが大量に海外流出（パリやボストンへ）</p>
1855 年	<p>パリ万国博覧会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・オランダが自国部門に日本の物品を並べる
1856 年	<p>『北斎漫画』一巻が偶然パリで発見される</p>
1862 年	<p>ロンドン万国博覧会 ※ジャポニスム元年</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ラザフォード・オールコックの出品（614点） <p style="text-align: center;">↓</p> <p>日本からの仕入れが急激に増加</p>
1867 年	<p>パリ万国博覧会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本正式参加 ・お茶屋が大人気に
1873 年	<p>ウィーン万国博覧会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・政府が海外への紹介に着手
1878 年	<p>パリ万国博覧会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本からの出展品が法外な値段であったという間に完売 「これは流行というよりはもはや熱狂である」 <p style="text-align: center;">↓ （エルネスト・シェノー）</p> <p>積極的に輸出</p>

葛飾北斎「漫画」シリーズ



パリ万国博覧会（左は 1867 年の茶屋娘 右は 1878 年の日本館）



マネ「エミール・ゾラ
の肖像」



モネ「ラ・ジャポ
ネーズ」



リヴィエール「エッフェ
塔三十六景」



葛飾北斎「富嶽三十六景 神奈川沖浪裏」



ギュスターヴ・クールベ「波」



歌川広重「鯉づくし」



フェリックス・ブラックモン「鯉に朝顔」



鈴木春信「採蓮美人」



クロード・モネ「舟遊び」



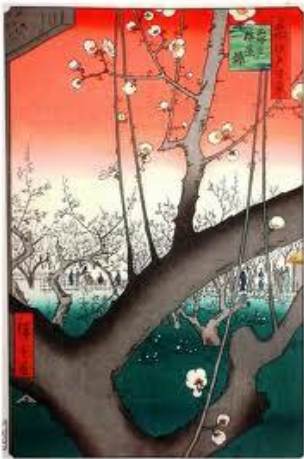
歌川広重「名所江戸百景
亀戸天神境内」



クロード・モネ「睡蓮の池と橋」



歌川広重「名所江戸百景
亀戸梅屋敷」



ポール・ゴーギャン「説教の後の
幻影」



歌川広重
「名所江戸百景
大はしあたけ
の夕立」



フィンセント・
ファン・ゴッホ
による模写





『ゴッホの手紙』（中）より（弟テオドルに宛てた手紙の中から一部抜粋）

日本人は素描をするのが速い、非常に速い、まるで稲妻のようだ、それは神経がこまかく、感覚が素直なためだ。

僕の仕事はみんな、多少とも日本画が基礎になっている。

いいかね、彼らみずからが花のように、自然の中に生きていくこんなに素朴な日本人たちがわれわれに教えるものこそ、真の宗教とも言えるものではないだろうか。日本の芸術を研究すれば、誰でももっと陽気にならずにはいられないはずだ。

僕は、日本人がその作品のすべてのものにもっている極度の明確さを、羨ましく思う。

表2. 浮世絵の見られる海外の美術館（カッコ内は所蔵する浮世絵点数）

大英博物館（5,000点超 ※版画）

- ・その優れた質においてヨーロッパ屈指。30点を超える写楽作品は圧巻。

ヴィクトリア&アルバート博物館（25,000点）

- ・膨大な点数を所蔵。江戸末期の錦絵が多くを占める。

ベルリン国立東洋美術館（7,000点 ※版画）

- ・初期版画から幕末・明治の錦絵まで幅広く所蔵。

ベルギー王立美術歴史博物館（約7,500点）

- ・春信の錦絵や、充実した写楽作品など、その質はきわめて高い。

フランス国立ギメ東洋美術館（約3,000点）

- ・エミール・ギメの構想により設立されたアジア美術専門の美術館。春信の錦絵、歌麿全盛期の大首絵、写楽の大判大首絵など。

ライデン国立民族学博物館（約8,000点）

- ・シーボルト収集の日本民俗コレクションを土台に発展した博物館。北斎など、19世紀以後の錦絵の所蔵が多い。

ボストン美術館（約50,000点）

- ・その質において世界最高のものであることに疑いをはさむ者はいない。

シカゴ美術館（10,000点超）

- ・初期版画の充実度は目をみはるものがあり、春信「座敷八景」の初摺を揃えている。

メトロポリタン美術館（約3,500点）

- ・残存数の少ない初期版画をはじめ、春信、歌麿、写楽などの優品が含まれる。葛飾北斎の「富嶽三十六景」には初摺が多い。

ホノルル美術館（5,400点）

- ・初期版画が充実。とくに注目されているのがその半数に及ぶ広重作品。

＜ P A R T III ＞

表3. 日本の美術と西洋の美術の表現性

	日本美術	西洋美術
表現法	平面的（二次元） 線表現（輪郭線） 遠後前近法・遠小近大法 鮮やかな色彩・金銀の配色 省略と誇張 具象と抽象の併置	立体的（三次元） 面表現（明暗法） 遠近法（透視図法） 写実的な色彩 写実的描写 具象に限る
概 念	抽象性	写実性
対 象	自然中心 自然主義・宇宙観 生活美術 貴族・武士から町民まで広い 階層が対象	人間中心 人間中心の合理主義 純粹美術 王侯・貴族・ブルジョア階層 に限られる
構 図	非対称と余白 動的な構図 視点の自由度 斜線の構図	シンメトリーと黄金比 静的な構図 目線の視覚 黄金分割の構図

三井秀樹『かたちの日本美』（NHKブックス）P69より引用

現代人の評論① ドナルド・キーン（コロンビア大学名誉教授、日本国籍取得）

現在、日本人は日本の国宝級のものが外国に流出したことを嘆いています。日本のすばらしいものが外国へ流れていったことを、たいへん残念に思うような日本人がいますが、私に言わせると、流出はたいへんいいことだったと思います。というのは、もし日本の優れた美術が全部日本だけにしかなく、外国に日本の美術として二流、三流のものしかなければ、日本美術を正しく評価することはまったく不可能だったろうと思うからです。

現代人の評論② ジェラルド・ニーダム（ラットガーズ大学ダグラス・カレッジ美術部助教授）

19世紀の帝国主義は、そのひとつの側面として地球上のほかの地域、ほかの民族に対する純粋な好奇心というものを持っていた。そのあらわれのひとつが探検家たちに対する英雄崇拜であり、何度か開かれた万国博覧会の展示品の内容である。西洋の人々のこうした好奇心に応えるかのように訪れたのが日本の開国という事件であった。日本の開国はまさにほとんど未知に等しい、風変わりでしかも洗練された、極めて異質な文化との出会いをヨーロッパの人々にもたらしたのである。しかも、それは単に異質な文化としてだけでなく、生活のすべてに芸術的な価値が浸透した文化として、西洋の人々の目の前に姿を現わした。

19世紀の半ばともなると、それまでヨーロッパの美術の基本をなしていたギリシャ・ローマの芸術原理がもはやその活力をほとんど失ってしまって、単に形式的な敬意を払われるにすぎない存在に墮していた…。従来の芸術様式に取って代わるものとして、日本芸術はまさに恰好の時期にヨーロッパ、なかんずくフランスに入り込んでいったのである。

現代人の評論③ 高階秀爾（東京大学名誉教授 大原美術館館長）

日本美術にしても、19世紀の前半において必ずしも西欧で知られていなかったわけではない。しかし、遠近法や明暗法などによって支えられた現実再現の美学がなお確固たる権威を保っていた間は、日本は所詮単なる異国であった。その西欧の美学そのものが大きく揺らぎ始めた時、はじめて日本美術は強い「影響力」を持つようになった。

日本の文化的伝統においては、芸術は日常生活から切り離された別の世界をかたちづくるのではなく、きわめて自然に生活の一部をなすものである。芸術作品とはひとつの独立した自律的な「小宇宙」であるという西欧においてはきわめて重要な考え方は、日本の伝統的思考においては無縁のものだったようである。日本では、日常の実用的な事物もつねに芸術品になろうとする傾向を持ち、また芸術作品はつねに、それ自体きわめて芸術的である生活の場のなかで、ある一定の役割を果たすものである。

<参考文献>

01. アリス・ベーコン『明治日本の女たち』（みすず書房）2003
02. アレクサンダー・F・V・ヒューブナー『オーストリア外交官の明治維新』（新人物往来社）1988
03. エミール・ギメ『1876 ボンジュールかながわ』（有隣新書）1977
04. 大久保純一『カラー版 浮世絵』（岩波新書）2008
05. 大島清次『ジャポニスム』（講談社学術文庫）1992
06. 大庭節朗訳『ジャポニスム 1854年から1910年にかけてのフランス美術に対する日本の影響』（1982）
07. 黄文雄『日本人はなぜ世界から尊敬され続けるのか』（徳間書店）2011
08. 国立西洋美術館学芸課編集『ジャポニスム展図録』（1988）
09. 佐藤貴彦『日本人はこんなに素晴らしかった』（パレードブックス）2008
10. ジャポニスム学会編『ジャポニスム入門』（思文閣出版）2000
11. 瀬木慎一『日本美術の流出』（駸々堂）1985
12. 瀬木慎一『浮世絵世界をめぐる』（里文出版）1997
13. 高階秀爾『増補 日本美術を見る眼』（岩波現代文庫）2009
14. ドナルド・キーン『果てしなく美しい日本』（講談社学術文庫）2002
15. 芳賀徹『大君の使節』（中公新書）1968
16. 深井晃子『ジャポニスム イン ファッション』（平凡社）1994
17. フリーダ・フィッシャー『明治日本美術紀行』（講談社学術文庫）2002
18. 三井秀樹『美のジャポニスム』（文春新書）1999
19. 三井秀樹『形の美とは何か』（NHKブックス）2000
20. 村岡正明『日本絶賛語録』（小学館）2007
21. 吉見俊哉『博覧会の政治学』（中公新書）1992
22. ラザフォード・オールコック『幕末日本滞在記 中』（岩波文庫）1962
23. J・V・ゴッホーボンゲル編『ゴッホの手紙 中』（岩波文庫）1961
24. V・F・アルミニヨン『イタリア使節の幕末見聞記』（講談社学術文庫）2000